# 高大接続教育を意識した課題解決力の育成をめざす高校地理教育

小川　洋一

## １．はじめに

地理教育の目的は「持続可能な社会の実現のために、地球的、地域的諸問題について、地理的に探究し、解決に向けて模索していく資質を育成する」こと、つまり「市民性を育成する」ことにある。しかし、教育現場では地理的知識獲得に多くの時間をかけ、知識量の多寡による評価が行われてきた。このような学習の進め方では市民性を育成できないことを批判し、教育方法を提案する研究論文は多い。

最近では、PISA 型読解力など国際標準の学力向上や世界全体で推進されている ESD 教育（Education for Sustainable Development、持続可能な開発のための教育）の方法を用いて、地球規模や地域の諸課題の理解とそれらの解決に向けた資質・能力の育成が重視されるようになっている。また、2016 年に持続可能な開発目標（SDGs）が設定され、17 の目標 (1) が行動の形で示された。初等中等教育から高等教育まで、段階に応じた「課題解決学習」による「市民性を育成する地理教育」の推進が求められている。

高校でも「課題解決学習」を導入して「市民性を育成する地理教育」が展開されている一方で、受験に対応した授業への期待も高まっており、大学入試センター試験（以下センター試験）や国公立大学二次試験（以下二次試験）、私立大入試を意識した授業が進められている。そのため、より高得点をあげるための「知識伝達型授業」を中心に展開しているのが実情であり、高校での学びを大学での学びに繋ぐ「高大接続教育」が、大学入試に特化して接続してしまっている状況ともいえるだろう。

では、高校地理が大学入試に向けておかれた状況はどうだろうか。

理系生徒の多くがセンター試験の社会科科目を地理で受験する。その理由は、「覚える用語が他の社会科科目より少ない」、「自然環境などは理系的」、「理系的な思考力で解けることが多い」からである。また文系生徒の多くが二次試験や私立大学で受験可能な世界史や日本史を選び、地理はセンター試験でのみ選択する者が多い。二次試験や私立大入試における地理での受験者は、地理が特に得意で興味がある生徒か地歴 2 科目が必要な大学を受験する生徒に限られており、地理は敬遠されがちな科目になっている。

では「知識伝達型授業」を行えばセンター試験や二次試験で高得点を望めるのかというと、そうとは限らない。生徒は学習していくうちに知識の獲得のみでは高得点に結びつかない地理の難しさに、気付くようになる。センター試験は、地理の基本的な知識を問う問題だけでなく、地理的な見方・考え方及び地理的技能に基づいた考察力や思考力、判断力を必要とする問題まで幅広く出題されるからである。

地理を学ぶ動機が受験であったとしても、「地理的に探究し、解決に向けて模索していく市民的資質」をもつ生徒を多数輩出できれば、高校地理教育の役割を果たしたことになるのではないか。そして大学での学びに繋ぐ「高大接続教育」としても重要ではないか。そこで著者が授業者として「課題解決学習」を応用した「講義型授業」と「論述型授業」の実践を考察し、実施後の授業アンケートの分析を通じて「市民性を育成する地理教育」ができるかどうかを検証することが本研究の目的である。

## ２．課題解決学習の意義と生徒からみた理解力向上のための授業

近年、世界全体で推進されている ESD 教育の方法を用いて、地球規模や地域の諸課題の解決に向けた能力の育成が求められ、地理教育でも「課題解決学習」が重視されている。

現行学習指導要領の地理 B も、「現代世界の諸地域を取り上げ、（中略）地域の変容や構造を考察し、それらの地域にみられる地域的特色や地球的課題について説明したり、自分の解釈を加えて論述したり、討論したりするなどの学習活動を充実させる必要がある」としており、課題解決に向けたアクティブ・ラーニングや論述などの学習活動の必要性を説いている。

また、2015 年 8 月に中央教育審議会教育課程特別部会の論点整理においても、「知識・技能（何を知っているか、何ができるのか）」「思考力、判断力、表現力その他の能力（知っていること、できることをどう使うか）」「主体的に学習に取り組む態度（学びに向かう力、人間性、どのように社会と関わりよりよい人生を送るか）」の学力の三要素が示され、資質・能力を育成するために「課題解決的な学習の一層の充実」を求めた。

新学習指導要領では「地理総合」が必履修化され、さらに「地理探究」を選択すれば地理を深く学べるように構想されている。「地理総合」の内容は、GIS（Geographic Information System 地理情報システム）、グローバル、ESD 教育、防災を中心テーマに「課題解決学習」の充実が求められており、なかでも GIS を用いて世界の諸課題や自然災害を分析することで、課題解決学習がより深まることが期待される。特に ESD 教育を用いて「主体的に学習に取り組む態度（学びに向かう力・人間性等）」の育成を前提に、「一国のみでは解決が難しく国際協力が必要となる環境、資源・エネルギー、人口、食料、居住・都市問題、貧困問題などの地球的課題について、それらの現れ方やその要因を考察」し、「高校では地球的課題の関連やそれぞれの現状を踏まえて解決策を構想する。現状の解決策はよいか、どの解決策がより望ましいか、解決策をどう改善していくかを判断する」[(2)]ことが求められるようになる。

このように ESD 教育及び新学習指導要領の求める「持続可能な社会づくりに参加する」観点は、世界や地域の諸課題を解決していこうとする人材を喫緊に育成しなければならないということでもあり、それはアクティブ・ラーニングによる課題解決に向けた議論やプレゼンテーション、さらには自分の意見をまとめて具体的提案に至る「社会参画」を意図したものである。

2016 年の社会・地理歴史・公民ワーキンググループの審議のとりまとめにおいて、課題解決的な学習活動として、課題把握（学習項目・なぜ、どうして、仮説～ではないか）→課題追究（調べて考察・関連づけ、話し合い）→課題解決（結論、～である、～と考えられる）という学習過程が示された[(3)]。これは「課題解決学習」を具体的な進め方を示したものだが、学習内容、校種間の学習内容の連続性などを考慮して、柔軟に「課題把握」、「課題追究」、「課題解決」を解釈することにより、生徒にとってより有意義な授業が展開できることも考えられる[(4)]。

以上のような「課題解決」に向けた授業の推進はたいへん望ましいことであるが、その一方で受験に対応した授業への期待がますます高まっており、教師は生徒の進路実現のために期待に応えようとしている。

ベネッセ教育総合研究所の 2010 年と 2016 年の調査[5]によると、「教員の指導観として大切にしていること」について、中学校では「受験指導に役立つ力を学校の授業でも身に付けさせること」が 2016 年には 89.6%にも及び、また「教科書や学習指導要領の内容をとにかく最後まで扱うこと」が 78.8%にもなっており、受験を意識した教科指導が求められている様子が窺える。一方、高校では「自発的に学習する意欲や習慣を身に付けさせること」が 14.1%増えて最も高い 74.3%になったが、ほぼ同率で「受験指導に役立つ力を学校の授業でも身に付けさせること」が 73.3%だった。「自発的に学習する意欲や習慣を身に付けさせたい」が増えているのは、「アクティブ・ラーニング」の導入によるものであろう。そして中学校と同じく高校でも受験指導に役立つ授業が求められている。

また生徒に対する 2006 年と 2015 年の調査[6]によると、2015 年の中学生に対する「学校のどのような勉強方法が好きか」の質問に対して、「先生が黒板を使いながら教える授業」が 77.9%、「友達と話し合いながら進めていく授業」が 74.1%、「グループで何かを考えたり調べたりする授業」が 71.8%となった。なお「考えたり調べたりしたことをいろいろ工夫して発表する授業」は 2006 年に比べ 15.5%増えて 47.0%になった。ペア学習やグループ学習、調べ学習を好きとしているものの、「先生が黒板を使いながら教える授業」が最も高い割合を示した。教師の講義型授業が楽しいし、生徒は「授業で分かるようになりたい」ということであろう。

高校生でも「先生が黒板を使いながら教える授業」が最も高く 80.4%であった。次いで「友達と話し合いながら進めていく授業」が 9.8%増えて 70.5%に、「グループで何かを考えたり調べたりする授業」が 13.9%増えて 62.8%になった。

以上のように教師が黒板を使った授業は相変わらず人気が高く、教師の教え方や話の持ち味が発揮される授業に生徒は好感を持っていることにも注目したい。さらに課題解決型授業とアクティブ・ラーニングの導入が中学校や高校で進み、話し合いをして考えたり、調べたりする授業が行われる結果、生徒もこのような学習形態を好きと受け止めている。

アクティブ・ラーニングによる課題解決に向けた議論やプレゼンテーション、自分の意見をまとめて具体的提案に至る「社会参画」で「市民性を育成する地理教育」が推進されることが理想であろう。

しかし受験を意識した授業では、課題解決学習に時間をかけて行うことが難しい。そこで、講義型授業であっても課題把握→課題追究→課題解決の学習過程を柔軟に展開することによって課題解決学習に少しでも近づき、生徒に“理解できた”という充実感を与えられるような授業の流れをつくることができるのではないかということである。

市川は「人は意味づけや解釈をしないと覚えられない。情報を関連づけるための構造やルールを見いだすということが“理解する”ということである。知識を関連づけ構造化することが“理解する”ということである」[7]と述べている。つまり課題把握（学習項目・なぜ、どうして、～ではないか）→課題追究（調べて考察・関連づけ、話し合い）→課題解決（結論、～である、～と考えられる）の学習過程に従って、教師は「なぜ○○なのか」を繰り返し使い、知識を関連づけて説明することで、生徒は事象の因果関係を理解し応用して問題を解くようになる授業の流れをつくることが大切である。

## ３.「講義型授業」および「論述型授業」における課題解決学習の応用

著者が授業者として行った埼玉県立浦和高校 2016 年度 3 年生の理系の「講義型授業」と文系の「論述型授業」に、課題解決学習の課題把握→課題追究→課題解決の学習過程を応用して考察する。

3 年生 360 人のうち理系生徒は 220 人で、そのうちの 162 人が「地理」を選択した。センター試験では 162 人のほぼ全員が地理で受験したが、二次試験を地理で受験した生徒は皆無だった。一方、文系生徒 112 人のほとんどが「世界地誌」を選択し、センター試験ではほぼ全員が地理で受験したが、二次試験を地理で受験した生徒は 30 人だった。

3 年次の授業内容は理系文系ともに「地誌」が中心である。理系生徒は 2 年次までに系統地理分野を、文系生徒は同じく系統地理および地誌分野を終了しており、文系生徒はより深く「世界地誌」を学ぶようなカリキュラムになっている。

大学進学をめざしている生徒にとっては、センター試験および二次試験で少しでも高得点を取ることが学ぶ動機になっているのが現状である。センター試験の地理は、基本的な知識を問う問題から、地理的な見方・考え方及び地理的技能を基にした考察力や思考力、判断力を必要とする問題まで幅広い問題が出題されており、覚えることのみで正解を導けることが少なく「良問」が多いともいわれるが、難易度にばらつきがあり、指標の意味の正確な理解が難しい問題も少なからずあるという指摘もある[(8)]。そのため「地理は高得点が難しい」、「よくわからない」、「歴史と違って人が登場せず楽しくない」と感じる生徒も多く、敬遠されがちな科目である。

理系生徒に地理選択者が多いのは、「今までに多少は学習している」、「覚える知識が少なく応用が効く」、「自然環境など理系的な要素が多い」などの理由による。一方、文系生徒は歴史や地理、公民を学ぶが、二次試験や私立大受験で地理を選択できない大学が多く、地理が得意である生徒と地歴 2 科目を課す大学を受験する生徒を除き、多くの生徒は世界史または日本史で受験する。

このような状況であるからこそ、「課題解決学習」の「課題把握→課題追究→課題解決」の学習過程を理系の「講義型授業」と文系の「論述型授業」に柔軟に応用して、地球規模から地域における諸課題の解決に向けた能力を育成しておくことが重要なのである。

（1）理系の「講義型授業」

「課題解決学習」の「課題把握（なぜ、どうして、～ではないか）→課題追究（調べて考察、関連づけ、内容によってペアワークやグループワーク）→課題解決（～である。～と考えられる。）」の学習過程を「講義型授業」に応用する。授業者は「なぜ○○なのか」、「（生徒が）調べて考察した結果」、「○○である。○○と考えられる。○○と結論づけられる」を繰り返し使い、説明する。

①自作プリントを使いる。世界の自然環境、資源、産業、人口、都市、生活文化、民族・宗教などの情報を精査して地域のしくみを理解させ、できるだけ生徒が地域像を構築できるように構成する。授業では生徒が「スキーマ」を考え、メモができるように右側 4 分の 1 程度に空白スペースを設け、事後学習や受験準備に役立てる。

②黒板は地図描写などフル活用する。

③センター試験過去問題を配布し復習させる。

「東南アジア」の講義型授業を例に課題解決学習の学習過程を柔軟に応用すると、表 1 のようになる。

**表１　東南アジアの「課題把握→課題追究→課題解決」による授業展開**

| ○課題把握（なぜ、どうして、～ではないか。） | ○課題追究（調べて考察する。） | ○課題解決（～である。～と考えられる。） |
|---|---|---|
| ○自然環境 | | |
| ・なぜ火山噴火・地震・津波が多発するのか。 | ・地図に描かれた「線」に注目して考察。 | ・「線」は 4 枚のプレートの境目。インド・オーストラリアおよびフィリピン海とユーラシアの間は狭まる境界。海溝と付加体の島嶼が並ぶ。地震・津波、火山活動が活発。 |
| ・どのような地震災害が発生したのか。 | ・スマトラ島沖地震と国際的援助を調べる。 | ・2004 年 12 月のスマトラ島沖地震で、巨大な津波が近隣の国々を襲った。死者・行方不明者は二十数万人。国連をはじめ支援を表明、各国から食料・医療・災害復旧などの緊急援助、インド洋に津波警報システムが導入された。 |
| ・河川下流に人口密度が高いのはなぜか。 | ・地図で主要河川と大都市の位置を確認。 | ・インド亜大陸がヒマラヤ山脈を褶曲させ下にもぐり込み、インドシナ半島を東へ押し出して山脈をつくり、谷にメコン川などが流れ河口にデルタを形成。世界的な稲作地帯となり、人々の生活と経済活動の舞台となった。 |
| ・造山帯と鉱産資源の関係性はどうか。 | ・新期・古期造山帯の資源を調べる。 | ・新期造山帯では、石油、金、銅などの鉱産資源に恵まれる。古期造山帯にあるベトナムやインドネシアの新生代の第三紀に属する地層にも石炭が存在し、輸出されている。 |
| ・気候区には規則性があるのか。 | ・モンスーンと 4 つの気候区を調べ、特徴をまとめる。 | ・夏は太陽からの日射量が強く大陸で温まり、これに向かって海洋からモンスーンが吹き込み雨季をもたらす。特にチベット高原には強い上昇気流が生じ、湿った空気がヒマラヤ山脈やインドシナの山脈にぶつかり大雨となる。赤道～北緯 20 度に Af、Am、Aw、Cw 気候が規則的に分布。それぞれ赤道低圧帯・モンスーンの影響から説明できる。 |
| ○多様な民族と文化、どのように多民族化したか。 | ・言語分布とその背景。 | ・多民族の流入、インド文化や中国文化の影響を受け、異なる民族が混じり合ったために多様な言語を使用。主要民族を中心に多民族からなる「国家」がつくられた。 |
| ・英語を公用語としている国はどこか。 | ・各国の公用語を調べる。 | ・旧宗主国の言語を公用語としている国は、フィリピンとシンガポールだけ。シンガポールは中立性言語としての英語が日常生活や学校で広く使われている。 |
| ・東南アジア諸国の旧宗主国はどこか。 | ・旧宗主国と現在の影響を調べる。 | ・17～19C に東南アジアのほとんどが欧米の植民地となり、第 2 次世界大戦後に独立した。それぞれの旧宗主国の影響が今でも残る。 |
| ・宗教の違いはどうか。 | ・宗教伝播と、現在の影響力を調べる。 | ・大乗仏教は 4～5C に中国に支配されたベトナムへ、上座仏教は 11C にビルマ、13C にタイ王朝へ。イスラム教は 8C アラビア商人によってマレーシア、インドネシアへ。キリスト教は 16C 後半スペインの植民地になったフィリピンへ伝わった。 |

| | | |
|---|---|---|
| ・稲作が行われている場所。<br>・戦後の食糧難を解決した「緑の革命」とは何か。 | ・主要な稲作地域を調べる。<br>・緑の革命について調べる。 | ・夏のモンスーンによる高温多雨な自然環境の下で、沖積平野やデルタ、島嶼では棚田で行われてきた。<br>・1960 年代以降高収量品種の導入により収穫量が 2 倍以上に増加、米の自給率が高まったが、種子・化学肥料・農薬などに多額投資が必要で、支出が増え借金を抱えて土地を失う農家が増えた。インド・パキスタンへの普及、稲塚権次郎、フォーゲル博士・ボーログ博士の研究にもふれる。 |
| ・タイ、インドネシア、ベトナムにおける稲作の特色は何か。<br>・ | ・タイ、インドネシア、ベトナムの穀物自給率、米の輸出量、農業就業人口率を調べる。 | ・タイ：チャオプラヤ川流域。17～19C 周辺諸国は欧米の植民地となりプランテーション農業。タイは独立国として米を周辺の植民地へ輸出、現在も米輸出国だが離農化が進み若年層が首都バンコクへ。 インドネシア：世界 3 位の生産量。近年需要が増えて輸入。ベトナム：ドイモイ政策による生産責任制の導入とメコンデルタの灌漑の整備などで米の生産量、輸出量が増加。 |
| ・プランテーション農業とは何か。<br>・油ヤシの利用と問題点について説明せよ。 | ・プランテーション農業について。<br>・油ヤシの利用と問題点について調べる。 | ・18C 後半から宗主国により商品作物栽培をするプランテーション農業を導入。独立後は国や現地資本、アグリビジネスに移った。天然ゴム、油やし、コーヒー、バナナがある。<br>・油ヤシからパーム油を搾り、食用油（マーガリン・インスタント食品・スナック菓子などにも使用）・洗剤・化粧品・バイオ燃料などに利用。年中収穫でき単価が安いことから需要が増加。天然ゴム価格の下落とともに急速に栽培面積が拡大。搾油のための精油プラントを含めた農園開発のためカリマンタン島などの熱帯林が破壊され問題化。 |
| ・ASEAN の人口規模を EU、アメリカと比較せよ。ASEAN の目的は何か。<br>・ASEAN 諸国の工業化はどのように進んだのか。 | ・ASEAN について人口、GDP、設立目的を調べる。<br>・ASEAN 諸国の工業化の進展について調べる。 | ・東西冷戦下、インドシナの社会主義勢力に対抗するためタイ、フィリピン、マレーシア、シンガポール、インドネシアの 5 カ国で結成。冷戦終了後の 1990 年代以降 5 か国が加わり、経済・社会・文化での協力を目指す。ASEAN＋3 として日本、中国、韓国との関係も高まっている。<br>・独裁政権下で輸入代替型工業化。1980 年代から工業製品の輸出による輸出指向型工業へと移行。優遇税制とインフラ整備を進め先進国企業を積極的に誘致する輸出加工区を設置。エレクトロニクス産業、自動車工業などが発展。輸入製品の多くは部品（中間財）。 |
| ・アジアの製造品の域内分業について説明せよ。<br>・各国の輸出品目の特徴を説明 | ・アジアの製造品の域内分業について調べる。<br>・輸出品目をみて、該当する | ・アジアの多国間貿易は、ASEAN、中国、韓国、日本が分担して部品（中間財）を製造し輸出入、製品（最終財）を完成させる。タイを自動車産業の拠点とした域内分業をイメージすると分かりやすい。<br>・輸出品目から該当する ASEAN 諸国（インドネシア、フィリピン、ベトナム、タイ、マレーシア、シンガポール）を |

| せよ。 | 国はどこか。 | 考える。その後、ペアワークで考え発言、まとめる。 |
|---|---|---|
| ○各国の諸問題 | | |
| ・フィリピンの経済成長が遅れているのはなぜか。また貧困者の生活実態はどのようなものか。 | ・フィリピンの農業と工業化、「就労する児童の実態」を調べる。 | ・大土地所有制が残存し農業生産力が十分でなく、開発独裁が続いて工業化が遅れた。若年層が多く、外資が進出し成長が期待されている。低所得層は海外での出稼ぎが多く、送金が国の経済を支えている。「就労する児童の割合」が高いことに着目する。首都マニラにはストリートチルドレンが多く、国際的に子どもの権利が問題化しており、その実態と支援について説明する。 |
| ・ベトナムの経済政策はどのようなものか。 | ・ドイモイ政策について調べる。 | ・ベトナム戦争後 1976 年に南北統一され、1986 年よりドイモイと呼ばれる社会主義市場経済を導入し外国企業を誘致。特に安価な労働力を求めた衣料企業などが進出した。 |
| ・タイで自動車産業が成長したのはなぜか。 | ・自動車生産の推移を調べる。 | ・比較的安定した政情や優秀な労働力、交通要地を理由に、輸出港に近くインフラ整備された工業団地に日米欧など多くの自動車メーカーが進出した。 |
| ・マレーシアの民族問題はどのようなものか。 | ・多民族国家としての問題点を調べる。 | ・多数派はマレー系だが経済的実権は中国系が持つため、マレー系優先政策を進めて経済的地位の向上につとめたが、批判を強く受けている。 |
| ・シンガポールの民族対立を和らげる政策、産業育成について説明せよ。 | ・民族構成と対立を和らげる政策、産業の育成について調べる。 | ・中国系が 75%を占める多民族国家だが、出身に関わらず実力主義を唱え、産業では輸出指向型工業や観光業、MICE（ Meeting、 Incentive、Convention、Exhibition）に力を入れ、これらの開催で多くの人を集めて観光業にも寄与しており、国際的な評価が上昇している。 |

「講義型授業」であっても課題把握（なぜ、どうして、～ではないか）→課題追究（調べて考察、関連づけ、内容によりペアワーク、グループワーク）→課題解決（結論、～である、～と考えられる）の学習過程を柔軟に展開し、教師は「なぜ○○なのか」、「調べて考察した結果」、「○○である。○○と考えられる。○○と結論づけられる」を繰り返し使い、説明することで、生徒は事象の因果関係を理解し応用して問題を解くようになる。つまり「理解して納得するという充実感」が得られるような授業の流れをつくることができる。

（2）文系の「論述型授業」

文系の「世界地誌」という授業は、「地理の論述力を高めたい」という生徒からの要望もあり、数年前に設定された科目で、設定当初は受講者 20 名から始まった。

文系の「論述型授業」も理系の「講義型授業」と同じように、課題把握、課題追究、課題解決の学習過程が考えられる。

①課題把握、「論述課題（問い）」は、二次試験で過去に出題されたものや教師が考えた世界や日本の諸課題を取り上げている。

②課題追究、論述するための情報収集、資料集や教師の自作教科書を参考に考察、構想する。30～180 字程度で論述し授業で発表、課題についてのキーワードが使用されているか、事実に基づいて論理的に論述されているかなどについて教師が説明し、質疑応答。
③課題解決、結論（解答）。さらに討論の内容を参考に再構成（修正）し最終結論（解答）とする。

課題は難問も多く、生徒は限られた時間のなかで教科書や資料集のみで論述することは困難なため、教師の自作教科書を参考に論述する。自作教科書は A4 サイズで約 300 ページに及ぶ。

最初は時間がかかりほとんどの生徒が字数を埋めることもできず、論述例に基づきアレンジして書いていくが、慣れてくると次第に自力で書き上げられるようになるので、教師はひたすら励まし続けアドバイスする。生徒数人が論述を発表し、さらに違う視点からの論述を発表。内容によりペアワークやグループワークで討論する。教師は生徒の疑問に答え、キーワードが使われているか、事実に基づいて正確に表現され論理的であるかを判定し、まとめとする。

「東アジア」、「東南アジア」、「中央アジア」を例にあげると、表 2 のようになる。

**表 2「論述型授業」の学習過程**

<table>
<tr><td rowspan="3">東アジア地誌</td><td colspan="2">○課題追究の参考資料(教師の自作教科書)　大韓民国…ソウルへの人口集中／ソウル・プサン軸での拠点開発／巨大な企業グループ財閥／中国…地形の特徴／長江、黄河、チュー川／多様な気候／多民族国家・少数民族と自治区・宗教／都市戸籍と都市戸籍／海外在住中国人（華僑・華人）／気候と農業地域区分／食料需給／改革開放政策／生産責任制／郷鎮企業／豊富な鉱産資源／経済特区・経済技術開発区／長江デルタ・チュー川デルタの製造業／水産業／格差を生む都市と農村／台湾と韓国の工業化の比較　など</td></tr>
<tr><td>○課題把握（問い）<br>・韓国の産業・経済の変化について述べよ。<br>・韓国について、人口や経済諸機能の首都への集中、地域間格差の拡大を抑制する政策について述べよ。<br>・台湾の産業構造の変化とその背景について述べよ。<br>・中国の 5 自治区の少数民族のうち、ウイグル族の宗教と食生活の特色を述べよ。<br>・黄河の特色と自然災害について述べよ。<br>・長江流域における開発と問題点について述べよ。<br>・中国の農業地域について、南北の特徴の違いを述べよ。<br>・中国の工業化の進展について説明せよ。<br>・パソコン生産における今日の国際分業のパターンと形成理由について述べよ。</td><td>○課題追究のキーワード<br>政府主導　財閥　電気電子産業<br>ソウル・プサン軸　地方分散政策<br>技術集約型産業　政府の優遇政策<br>オアシス　遊牧民と農耕民　イスラム教<br>森林伐採　土壌流失　断流現象<br>サンシャダム　生態系の破壊<br>稲作地域　畑作地域<br>改革開放政策　外資企業　経済特区　経済技術開発区<br>半導体製造部門　最終組立部門</td></tr>
<tr><td colspan="2">○課題把握(問い)の例　中国の経済成長と並行して生じた環境問題について 80 字以内で述べよ。<br>（模範解答例＝課題解決・結論例）環境問題対策が不十分な中での都市への人口流出は、農</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td></td><td colspan="2">地や森林の荒廃、砂漠化をまねき、都市部での石炭消費の増大や自動車の普及などは大気汚染などを深刻化させた。<br>（生徒の解答＝生徒の課題解決・結論）<br>・中国では経済成長に伴い石油・石炭などの化石燃料を大量に消費してきたが、有害物質の除去に関する技術の開発が遅れ、工場周辺の大気汚染や酸性雨といった環境問題が引き起こされている。<br>・自動車などの工業製品や工場から多くの二酸化炭素や有毒物質が発生して酸性雨や PM2.5 のような大気汚染、水質汚濁や公害などの健康被害が深刻な社会問題となっている。<br>・不十分な脱硫・脱窒装置だったため、工場の排気に含まれる SOx、NOx で酸性雨・大気汚染が深刻化した。また、農工業の発展に伴い、水質汚染・森林の過度な伐採も発生した。<br>・化石燃料の使用による大気汚染や化学物質による土壌や河川の汚染、森林伐採やそれに伴う砂漠化などがある。また黄河では水の過剰な使用により断流している地域もある。</td></tr>
<tr><td rowspan="4">東南アジア地誌</td><td colspan="2">○課題追究の参考資料(教師の自作教科書)　ASEAN 諸国の地誌（11 か国）／<br>＊インドネシア…火山活動・地震／エルニーニョ現象の影響／イスラム教やヒンドゥー教文化／コメの自給／コーヒー・天然ゴム・パーム油の輸出／エビの養殖／熱帯林と合板輸出、熱帯林の破壊／原油・天然ガス・石炭の輸出／外資の進出／＊フィリピン…植民地化の歴史／大土地所有制と貧困／クローニーキャピタリズム（縁故資本主義）／ビジネス・プロセス・アウトソーシング（BPO)／インフォーマルセクター／タイ…稲作とコメの輸出／外資導入と自動車産業／＊マレーシア…多民族化とマレー優先政策／天然ゴムと油ヤシ生産／電気電子産業の成長／＊シンガポール…多民族と中立性言語・英語の使用／国際金融センター・観光都市としての成長／MICE の成長／　など</td></tr>
<tr><td>○課題把握（問い）<br>・木材輸入に占める木材チップの輸入量が増加している理由について述べよ。<br>・ベトナムでのコメの生産量と輸出量が増加している理由について述べよ。<br>・ASEAN 諸国では、複数の言語を公用語と定めているが、中立的な言語が広く通用している国についてあげ、その民族構成と言語事情について述べよ。<br>・タイ、マレーシアの産業構成の変化をもたらした政治経済的背景について述べよ。<br>・マレーシアは他の ASEAN 諸国に比べても都市人口率が高い。その理由を農村社会の特色から述べよ。</td><td>○課題追究のキーワード<br>環境保護　丸太輸出規制　輸出国の国内産業育成<br>ドイモイ政策　メコンデルタの開発<br>中立性言語　中国語・マレー語・タミル語・英語<br><br>輸出加工区　優遇策　外資導入<br>小農経営　人口扶養率<br>大土地所有制　プランテーション<br>都市への人口流出</td></tr>
<tr><td colspan="2">○課題把握（問い）の例　東南アジアにおける油ヤシプランテーションにおける生産の特徴や問題点に言及して述べよ（120 字以内)。<br>○模範解答例＝課題解決・結論例<br>熱帯雨林気候に適する油ヤシから搾油されるパーム油は食用油・洗剤用・バイオディーゼルなど世界的需要が急増し、世界の 85%をインドネシア、マレーシアで生産しているが、農園開発による熱帯雨林の破壊が問題となっている。</td></tr>
</table>

| | |
|---|---|
| | ○生徒の解答＝生徒の課題解決・結論<br>・油ヤシは食料品や洗剤の原料としてだけでなく、環境にやさしいバイオ燃料としても需要が高まってきている。しかしその栽培のために大規模な原生林の伐採が行われており、熱帯雨林の急速な減少が問題となっている。<br>・油ヤシは、老木となった天然ゴムの木にかわり栽培が盛んになった。植物性の油で環境にやさしく、食用や工業用など用途が多岐にわたっており注目を浴びているが、農地拡大のために森林伐採が深刻なスピードで進行しており、生態系を脅かしている。<br>・それまで盛んだった天然ゴムの生産にかわって、利益率の高い油ヤシが多く栽培されるようになった。食用油や石けん、バイオディーゼルなど油ヤシを原料とする製品がより消費されるにつれて、農場をつくるための森林伐採が問題となっている。<br>○課題把握（問い）　輸出加工区が工業化に果たした役割について次の語句を使用して 120 字以内で述べよ。　安価な労動力　　外国資本　　輸出指向型　　免税措置<br>○模範解答例＝課題解決・結論例<br>政府主導のため安定しており、免税措置などの優遇政策を行うことで、積極的な外国資本の導入による輸出指向型工業化を行った。企業は安価な労働力を求めて進出してくるため、国内の雇用が増え、労働者の技術が向上するといった利点があった。<br>○生徒の解答＝生徒の課題解決・結論<br>・輸出加工区とは臨海部に設置され、安価な労働力と免罪措置を売りに政府が主導となって外国資本を呼び込もうとする地域のこと。これにより輸出指向型工業化が発達し外貨取得や雇用増大がはかれ、その国の工業化と経済発展のきっかけとなった。<br>・免税措置などの企業の優遇政策を採る輸出加工区では現地の安価な労働力にひかれ、多くの外国資本が進出した。区域では労働集約的な輸出指向型工業が行われ、現地では技術力の蓄積、外貨導入による経済活性化により経済・産業が発展した |
| 中央アジア地誌 | ○課題追究の参考資料(教師の自作教科書)　　中央アジア諸国の地誌（5 か国）／乾燥気候／遊牧民・定住民の歴史／「オアシスの道」・「草原の道」／イスラム教の世界／旧ソ連の支配と連携／石油・天然ガス、鉱産資源の輸出と諸問題／上海協力機構／中国の「一帯一路構想」と中央アジア（これは 2017 年度追加）／中央アジアの環境問題 |
| | ○課題把握（問い）の例　中央アジア諸国のような内陸国には日本のような島国にはない悩みがある。内陸国の悩みを、政治的側面から 60 字以内で述べよ。<br>（模範解答例＝課題解決・結論例）国際河川や特定の空路等を通じないと隣接国以外の国とは直接交流できず閉鎖的で、周辺国の政治情勢に左右されやすい。<br>○生徒の解答＝生徒の課題解決・結論<br>・おもな貿易網やパイプラインなどのエネルギー供給網、食糧調達網は隣国を介するため、隣国との友好関係の維持が絶対となる。<br>・国境線で隣国に囲まれているので、資源や農産物を安定的に確保するため周辺と友好関係を保つ必要性が大きい。<br>・外国との貿易に際して海が使えないため周辺国と協調して物資を輸送する必要があり、また、国境線の位置に関して対立が生じる。<br>○課題把握（問い）の例　「一帯一路」構想について述べ、この構想に対する中国、ロシア、 |

| | |
|---|---|
| | インドの立場の違いについて次の語句を使って述べよ。影響力　旧ソ連諸国　カシミール<br>○模範解答例＝課題解決・結論例　（2017 年度追加）<br>中国によるアジアとヨーロッパとをつなぐ巨大な経済圏構想のことで、この地域での中国の影響力を強めたい狙いがある。一方、ロシアは、旧ソ連諸国とユーラシア経済連合を発足させ、人、もの、資本の流通を自由化しており相互防衛条約を結んでいるが、友好関係がある中国と連携することで影響力を確保したい思惑がある。また、インドは一帯一路に含まれるカシミールをめぐるパキスタンとの領有権争いがあり、一路によるインド包囲網に警戒感を強めている。<br>○生徒の解答＝生徒の課題解決・結論(2017 年度追加)<br>・一帯一路構想とは、海上と陸上のシルクロードで中国、アジア、ヨーロッパを結び付ける巨大な経済圏のことである。この構想の中心は中国であり、シルクロードからはずれているロシアは中央アジアの旧ソ連諸国の貿易への影響力がなくなることを懸念している。またこの経済圏にはカシミール地方も含まれており、中国はインドに対し牽制する姿勢を見せており、カシミール地方の領有権を主張するインドは反対の構えを見せている。 |

生徒は課題を把握して追究した結果、教師が用意した模範解答例（＝課題解決・結論例）に対してさまざまな論述の表現で解答（課題解決・結論）している。その過程で、仲間の解答を参考にしながら修正し、より良い表現を選びながら結論付けるようになる。

例えば東アジア地誌の中から、中国の環境対策についての生徒の解答例を取り上げてみると、「石炭消費や自動車排気ガスからの $SO_X$,$NO_X$ の排出による大気汚染、PM2.5、酸性雨、$CO_2$ 排出量、技術開発の遅れ、日韓による公害問題対策への協力、水質汚濁、土壌汚染、健康被害、森林伐採による土壌流出や砂漠化、水需要の高まりによる黄河の断流現象」などさまざまである。さらに課題解決の提案まで述べるものもおり、議論し提案する「社会参画」の必要性を述べる生徒もいるが、限られた時間で行う文系の「論述型授業」では、生徒が課題解決方法を提案することまでは求めない「条件付論述」としている。論述の評価は、「キーワードを用いて正確に表現しているかどうか」を基準としているので、生徒は事実分析に基づくより正確な表現を目指すようになっていく。

今井は「人は思い込みから間違いに気づき修正しながら学んでいく。学校は“知識を覚える場”ではなく、知識を使う練習をし、探究する場となるべきだ。知識を使う練習とは、持っている知識を様々な分野でどんどん使い、それによって、新しい知識を自分で発見し、得ていくということである。レベルの設定が現状よりも高すぎても、低すぎてもうまくいかない。現状での子供の知識を見極め、自分で上がっていけるちょうどよいレベル設定をする。子どもの間違いを頭から否定せず、辛抱する。子どもが誤ったスキーマを持っている時にはそれを見極め、子どもが自分のスキーマがおかしいことに気づく状況を設定する」[(9)]。このようなことが「論文型授業」に求められる最も大切な観点であろう。

以上のような「条件付論述（記述）」については、2020 年度から予定されている「大学入学共通テスト」において国語と数学で導入され、さらに 2024 年度以降からは地理歴史・公民や理科に広げることが検討されている。導入する意義については、「自らの力で考え出すこととなり、より主体的な思考力・判断力の発揮が期待できる。思考のプロセスが、文や文章の作成を通じて自覚的なものとなることにより、より論理的な思考力・表現力の発揮が期待でき、これらは、大学での研究や、社会活動・経済活動などで必要とされる“課題

解決のためのサイクル”を実行できる力を身につけるための学習活動であり、このような力は、大学や社会人へのレディネスとして当然必要な能力だといえる」[10] と述べている。

## ４．生徒アンケートによる分析

すべての授業終了時に自由記述式の授業アンケートを行い、「育成すべき 3 つの資質・能力」に基づいた 6 項目に「学習について」を加えた以下に上げる 7 項目に分類して分析した。

・知識、技能：○「地域の知識が増した」、○「国や地域のイメージが持てるようになった」
・思考力、判断力、表現力その他の能力：○「関連性、事象のつながりが理解できた」、
　○「地歴公民や他教科の内容が深くつながっている」
・主体的に学習に取り組む態度：○「諸地域の課題について関心を持ち解決を望む」、
　○「将来の学びや仕事に活かす」
　○「学習方法について」

（1）理系生徒のアンケート結果（図 1）と記述内容の一部（表 3）

**図 1**

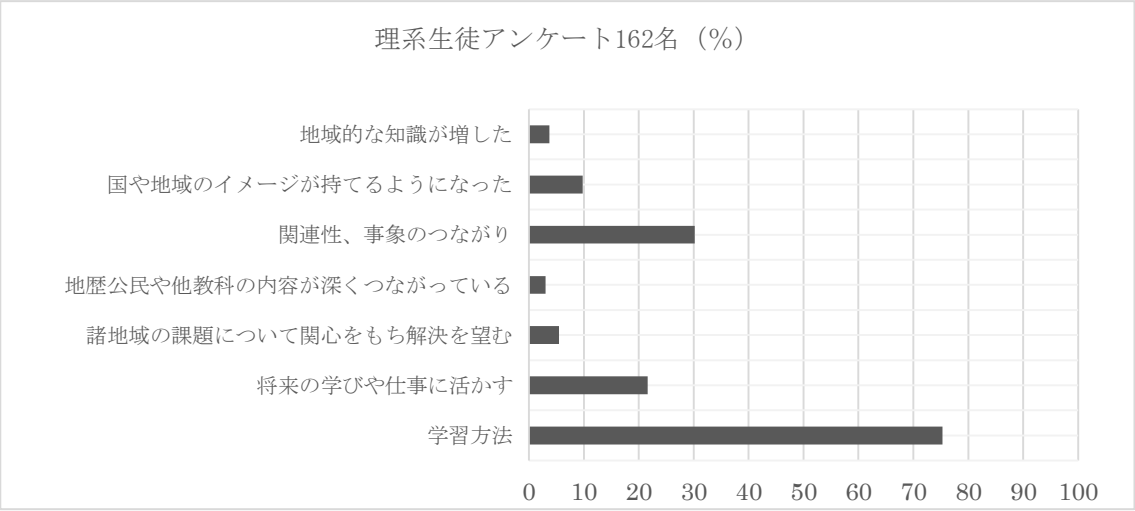



**表３　理系生徒アンケート**

| |
|---|
| ○学習方法について |
| ・地理は他の社会科の学習と違ってただ覚えるだけでは問題が解けないということに難しさと新鮮な驚き、面白さを感じた。統計や表の傾向を読み取るにしても、その一つのデータに対していくつもの要素が絡んできて、深く考えないと容易に誤った選択をしてしまう。そういうことを学ぶことによって自分は一つの問題に対していろいろな側面、事情を鑑みて多面的な考え解決に導くことを学んだ。一つの情報に踊らされるのではなく、いろいろな面から考えてしっかりと自分の意見を貫いたり、時には変えたりしていきたいと思う。 |
| ・授業は、ほぼすべての出来事について因果関係を説明してくださり、つかえることなくすっと頭の中に入ってきた。プリントもただの穴埋め形式のものではなく、右側に空欄があって自分でまとめることができたり、何気ない一言をメモしたりすることができるというのはとてもいいことだと思った。 |
| ○思考力・判断力に関するもの。関連性、事象のつながりについて |

・地理は暗記ではなく原理原則をしっかり理解し、最低限の知識を身に付け、あとはその応用で解くということに気付き、理系科目に似ている気がしてどんどん解けるようになった。
・中学時代などの勉強ではただ暗記していたような内容も地理の思考力があれば、その原因や経緯を含めて理解できるようになった。世の中の色々なことに関心を持ち、様々なデータの要因を推測したりすることもできるようになった。
○主体的に学習に取り組む態度。将来の学びや仕事に活かす
・グローバル化の進む今の時代に必要な知識は、他人の文化を学び、分け隔てなく人に接することが必要で、それを実現させるには地理を学ぶべきだと思う。
・自分は医学部志望で地理を必要とする感じがしませんが、実際、途上国の医療の原因、問題を知ることは将来その地へ行って医療活動をする際に必要な知識であるし、他国の先進状況を知ることも非常に重要であると思う。

最も多かったのは「学習方法」で 75.3%だった。そのうち、「教師の授業について」が 32.7%、「センター試験の結果について」が 28.4%、「プリントについて」が 14.2%だった。

「教師の授業について」は、「納得し理解しやすい原因の説明」や「すべての出来事について因果関係を説明」していたので理解できるようになったというものが多かった。「センター試験の結果」については、多くが「ほぼ満足できる得点が取れた」としているのに対して、「勉強不足で取れなかった」というものも目立った。「プリントについて」は、「ただの穴埋め形式のものではなく、右側に空欄があって自分でまとめることができたり、何気ない一言をメモしたりすることができてとてもよかった」という感想があった。

二番目に多かったのは思考力・判断力に関するもので、「関連性、事象のつながりが理解できた」が 30.2%だった。「地理は暗記ではなく原理原則をしっかり理解し、最低限の知識を身に付け、その応用で解けることに気付き、理系科目に似ている」というものや「世の中の色々なことに関心を持ち、様々なデータの要因を推測したりすることもできるようになった」、「前に覚えた知識を応用すれば解けるというのが面白い」などがあった。

三番目に多かったのは「主体的に学習に取り組む態度」に関するもので、「将来の学びや仕事に活かす」が 21.6%だった。「グローバル化の進む今の時代に必要な知識は、他人の文化を学び、分け隔てなく人に接することが必要で、それを実現させるには地理を学ぶべきだ」、「自分は医学部志望だが、途上国の医療の原因、問題を知ることは将来その地へ行って医療活動をする際に必要な知識であるし、他国の先進状況を知ることも非常に重要である」などがあった。

高校地理の学習を終えるにあたり、原理原則を理解してそれを応用するという思考力や判断力が高まったことや、世界的課題を知ることは将来の仕事や活動をする際にとても重要であるといった内容の記述が多くみられた。

（2）文系生徒のアンケート分析（図 2）と記述内容の一部（表 4）

**図２**

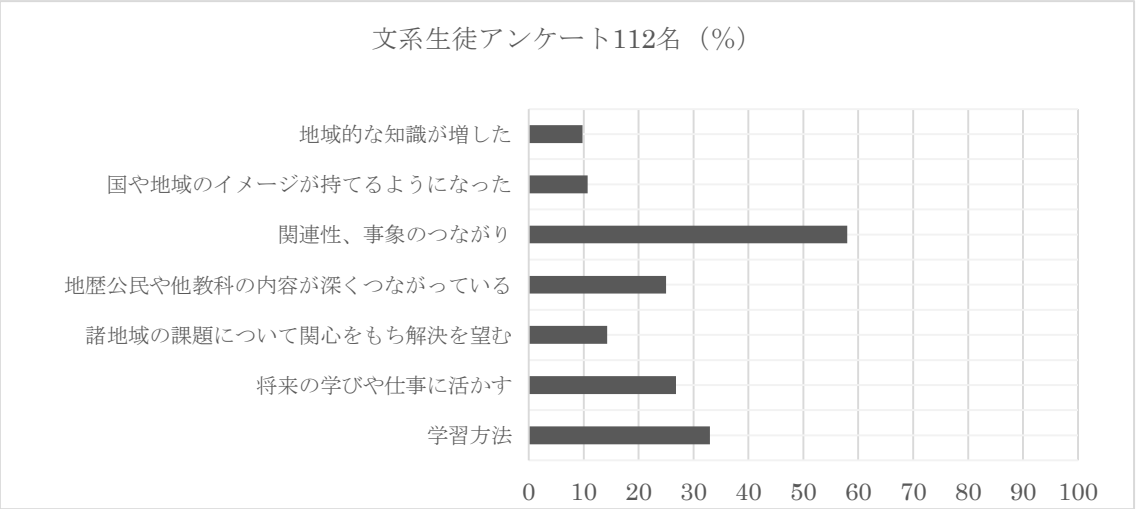



**表４　文系生徒アンケート**

○思考力・判断力・表現力に関するもの。関連性、事象のつながりについて

・地理は今後受験だけではなく、様々な場面で知識として、あるいは常識として問われることの多い実践的な学問であるし、「考える力」によってはさらに多くの地理的観察、考察を深めることのできるチャンスがあると思われるので、そのような見方、多様な角度からものを見る姿勢から多くのことに取り組んでいきたい。

・これまで歴史、地理条件、気候などまで深く掘り下げることはなかったが、それらが密接につながりあって、現在の政策やこれまでの政策、現在の国内における状況、それぞれの国の関わり方をもたらしているということを理解できた。世界の結びつきを深く掘り下げて、広い視野で見て考え、知識から結びつけて考察する能力を身につけることができた。

○学習方法について

・「常に考えることを念頭に置く」こと、教科書の知識を正確に覚えていれば論述問題にも対応できる世界史や日本史と違って、地理で扱うような事柄には正答の無いものも少なくない。そのような中で、限られた資料の中で、どのようにして自分なりの答えをまとめることができるかという力を育成する上で、非常に良い訓練となった。また、「論述力の大切さ」である。自分の中では完璧に覚えたと思っているようなことでも、実際に他者に伝わるように書こうとすると、上手く表現できないことも多い。

・資料プリントは隅々まで網羅されていて時間をかけて通読すると、大体の知識を得ることができた。それをもとに考えて論述問題を解くことは簡単ではなかったが、センター試験のような選択式の問題の点数は飛躍的に上がった。授業の予習ができていた時は解説がすらすらと頭に入ってきて、分かっている所、足りないとことがどこなのかを理解できた。しかし、予習ができていないとそれは難しかった。

○主体的に学習に取り組む態度。将来の学びや仕事に活かす

・各地域の地形、経済面の違いによって起こる問題も様々であることが分かった。また、その問題を解決するのもそう簡単にはいかないことを学んだ。グローバル人材を求められる私たちは、

将来必ずこの問題を解決しなければならないと思った。そういう意味も地誌の授業にあると感じた。

・私は将来外国で仕事がしたいと思っているので、そのためにも各国の状況を把握することは重要だと考えている。授業で学んだ世界の都市、人口、産業などに関する知識は、将来必ずどこかで活かされると確信している。この授業を通して特に身に付いたと思うのは、実際に自分の目や耳で確かめることの大切さである。自分で最初に持っていたイメージとは全く異なる事実を習った時は、特にそのことを実感した。大学へ入ると分野はさらに細分化されるが、さまざまな知識を吸収することは、全体のイメージをつかむうえでとても大切だと思う。大学でもこの姿勢を変えず、さらに成長できるようになりたい。

（思考力・判断力・表現力に関するもの。関連性、事象のつながりについて）

・経済や歴史を学ぶにしても地域の産業構造や人口、地形などを知っていた方が断然深い思考をすることができるし、その地域の状況を知ることによって過去のことについて学んだ時より深く理解できると思った。

・地誌では世界の横のつながりを学び、世界史では世界の縦のつながりを学んだが、両方の科目を学んでいくうちに、地理、世界史のつながりを感じる機会が増え、どちらの内容も詳しく頭に入り、理解、納得できたのがとても嬉しかった。

最も高かったのは「思考力・判断力・表現力」に関するもので「関連性、事象のつながり」が 58.0%だった。アンケートには、「論理的に理解できる部分も多く、ただのデータだと思っていたものにも理由があることが分かっていくことが面白かった」、「これまで歴史、地理条件、気候などまで深く掘り下げることはなかったが、それらが密接につながりあって、現在の政策やこれまでの政策、現在の国内における状況、それぞれの国の関わり方をもたらしているということを理解できた。世界の結びつきを深く掘り下げて、広い視野で見て考え、知識から結びつけて考察する能力を身につけることができた」などがあった。

二番目に多かったのは「学習方法」の 33.0%だった。「“常に考えることを念頭に置く”こと、教科書の知識を正確に覚えていれば論述問題にも対応できる世界史や日本史と違って、地理で扱うような事柄には正答の無いものも少なくない。そのような中で、限られた資料の中で、どのようにして自分なりの答えをまとめることができるかという力を育成する上で、非常に良い訓練となった。また、“論述力の大切さ”である。自分の中では完璧に覚えたと思っているようなことでも、実際に他者に伝わるように書こうとすると、上手く表現できないことも多い」、「資料プリントは隅々まで網羅されていて時間をかけて通読すると、大体の知識を得ることができた。それをもとに考えて論述問題を解くことは簡単ではなかったが、センター試験のような選択式の問題の点数は飛躍的に上がった。授業の予習ができていた時は解説がすらすらと頭に入ってきて、分かっている所、足りないとことがどこなのかを理解できた。しかし、予習ができていないとそれは難しかった」、「講義やクラスメートの発言からも多くを学べた。発言する人たちの素晴らしい解答で自分も刺激を受けた」、「地誌では自分以外の生徒の意見を聞ける機会があり、本当に目から鱗の授業だった」、「レベルの高い課題はかなり実践的で、記述力も上がった。また、他の人の解答を聞くというのも自分とは違う観点からみた答えを知ることができてすごくよかった」などがあった。

三番目に多かったのが「将来の学びや仕事に活かす」の 26.8%、次いで「地歴公民や他教科の内容が深くつながっている」の 25.0%だった。「問題を解決するのもそう簡単にはいかないことを学んだ。グローバル人材を求められる私たちは、将来必ずこの問題を解決しなければならないと思った。そういう意味も地誌の授業にあると感じた」、「世界各国の実情について、もっと知りたいと思うようになり、大学における勉強のモチベーションをあげることができた」、「地理は将来世界に出て、世界のどこかを支えていく人材になる私たちにとって必要不可欠な知識であるので、高校で学んだことを活かすとともに大学に行ってからも学び続けたい」などがあった。

課題に対して自分なりにまとめて表現する論述力が向上したが、それには自分とは違う観点での仲間の論述を聞いて参考にすることが大いに役立ったことや、世界的な課題解決は簡単ではないが、将来この課題を自分達で解決しなければならないという記述もみられた。

## ５．まとめと課題

高校での学びを大学での学びに繋ぐ「高大接続教育」が、大学入試に特化して接続している状況の中、受験を意識した「講義型授業」と「論述型授業」で、「市民性を育成する地理教育」を推進し、大学での学びに繋ぐことができたのだろうか。

理系の「講義型授業」であっても（1）課題把握、(2）課題追究、(3）課題解決の学習過程を柔軟に展開し、教師は「なぜ〇〇なのか」、「調べて考察した結果」、「〇〇である。〇〇と考えられる。〇〇と結論づけられる」を繰り返し使い説明することで、生徒は事象の因果関係を理解し応用して問題を解くようになる。つまり「理解して納得した」という充実感が得られるような授業の流れをつくることができる。大切なのは教師が生徒の学びの構造を理解し、授業を工夫して、生徒が「納得する、分かる授業」を行うことである。

アンケートには「地理は暗記ではなく原理原則をしっかり理解し、最低限の知識を身に付け、その応用で解けることに気付き、理系科目に似ている」や「世の中の色々なことに関心を持ち、様々なデータの要因を推測したりすることもできるようになった」、「前に覚えた知識を応用すれば解けるというのが面白い」など、自身の思考力や判断力が高まったことを思わせる記述がみられた。

一方、文系の「論述型授業」は、(1）課題把握、「論述課題（問い)」、(2）課題追究、論述するための情報収集、資料集や教師の自作教科書を参考に考察、構想して論述し授業で発表。キーワードの使用や事実に基づき論理的であるかを教師が説明。質疑応答。(3）課題解決、結論（解答)。討論の内容を参考に再構成（修正）し最終結論（解答）とする。

この学習過程を踏むことにより、仲間の結論（解答）を参考にしながら修正して、より良い表現を選択して結論付けるようになる。それは、より論理的な思考力・表現力の発揮が期待でき、大学での研究や、社会活動・経済活動などで必要とされる“課題解決のためのサイクル”を実行できる力を身に付けることができる。

アンケートには「“常に考えることを念頭に置く”こと、地理で扱うような事柄には正答の無いものも少なくない。そのような中で、限られた資料の中で、どのようにして自分なりの答えをまとめることができるかという力を育成する上で、非常に良い訓練となった」。また、「“論述力の大切さ”である。自分の中では完璧に覚えたと思っているようなことでも、

実際に他者に伝わるように書こうとすると、上手く表現できないことも多い」、「レベルの高い課題はかなり実践的で、記述力も上がった。また、他の人の解答を聞くというのも自分とは違う観点からみた答えを知ることができてすごくよかった」と、自身の論述力の向上を窺わせる記述がみられた。

ある生徒は「地理は他の社会科の学習と違ってただ覚えるだけでは問題が解けないということに難しさと新鮮な驚き、面白さを感じた。統計や表の傾向を読み取るにしても、その一つのデータに対していくつもの要素が絡んできて、深く考えないと容易に誤った選択をしてしまう。そういうことを学ぶことによって自分は一つの問題に対していろいろな側面、事情を鑑みて多面的な考え解決に導くことを学んだ。一つの情報に踊らされるのではなく、いろいろな面から考えてしっかりと自分の意見を貫いたり、時には変えたりしていきたいと思う」と多面的な考えから解決に導くことを学んだと述べている。

そして最後に「グローバル化の進む今の時代に必要な知識は、他人の文化を学び、分け隔てなく人に接することが必要で、それを実現させるには地理を学ぶべきだ」、「自分は医学部志望だが、途上国の医療の原因、問題を知ることは将来その地へ行って医療活動をする際に必要な知識であるし、他国の先進状況を知ることも非常に重要である」と述べている。ある生徒は「各地域の地形、経済面の違いによって起こる問題も様々であることが分かった。また、その問題を解決するのもそう簡単にはいかないことを学んだ。グローバル人材を求められる私たちは、将来必ずこの問題を解決しなければならないと思った。そういう意味も地誌の授業にあると感じた」として、自分たちが問題を解決しなければならないと述べている。またある生徒は「地理は将来世界に出て、世界のどこかを支えていく人材になる私たちにとって必要不可欠な知識であるので、高校で学んだことを活かすとともに大学に行ってからも学び続けたい」など、理系文系ともに「市民性を育成する地理教育」と大学への学びに繋がる「高大接続教育」の成果とも読み取れる記述が少なからずあったことは喜ばしいことである。

地理を学ぶ動機が受験であったが、生徒アンケート結果からみれば「解決に向けて模索していく市民的資質」をもつ生徒を少なからず輩出できたといえる。また「高大接続」を意識した高校地理教育の役割を十分とはいえないながらも果たしているといってよいだろう。ただし「課題解決学習」は、アクティブ・ラーニングによる課題解決に向けた議論やプレゼンテーション、自分の意見をまとめて具体的提案までに至る「社会参画」を意図したものである。「課題解決学習」に時間をかけて行うことが難しい現状をふまえ、具体的提案に至る「社会参画」をどのように授業に取り込んでいくかが今後の課題である。

**注**

（1）　世界を変えるための 17 の目標は、「1 貧困をなくそう、2 飢餓をゼロに、3 すべての人に健康と福祉を、4 質の高い教育をみんなに、5 ジェンダー平等を実現しよう、6 安全な水とトイレを世界中に、7 エネルギーをみんなに、そしてクリーンに、8 働きがいも経済成長も、9 産業と技術革新の基礎をつくろう、10 人や国の不平等をなくそう、11 住み続けられるまちづくりを、12 つくる責任使う責任、13 気候変動に具体的な対策、14 海の豊かさも守ろう、15 陸の豊かさも守ろう、16 平和と公平を全ての人に、17 パートナーシップで目標を達成しよう」である。

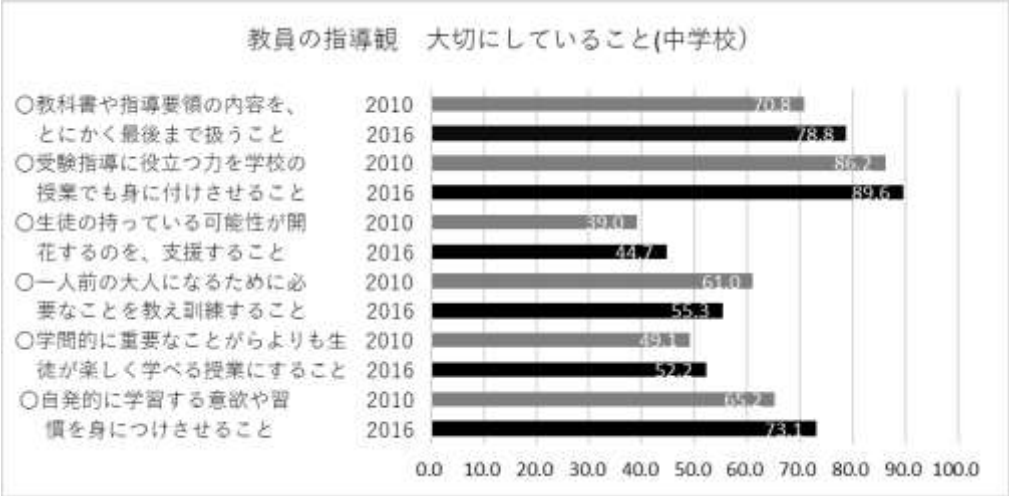
(2)　永田成文「これから考えたい地理 ESD 授業とは—持続可能社会の視点からのアプローチ—価値と態度の育成を視野に入れた思考・判断・表現」社会科教育、2017 年 8 月号、明治図書、30－33 頁

(3)　社会、地理歴史、公民における学習過程の例（たたき台）教育課程部会社会・地理歴史・公民ワーキンググループ（2016 年 4 月）

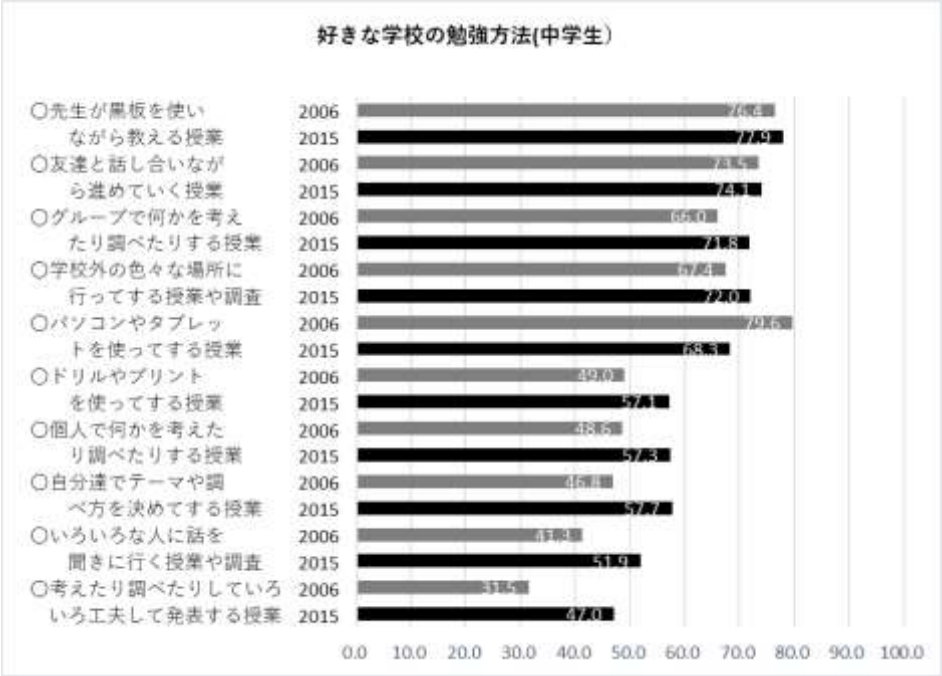
| | 課題把握 | | 課題追究 | | 課題解決 | 新たな課題 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 動機付け | 方向付け | 情報収集 | 考察・構想 | まとめ | 振り返り |
| 主な学習過程の例 | ●学習課題を設定する<br>・社会的事象（等）を知る<br>・気付きや疑問を出し合う<br>・課題意識を醸成する<br>・学習課題を設定する | ●課題解決の見通しを持つ<br>・予想や仮説を立てる<br>・調査方法、追究方法を吟味する<br>・学習計画を立てる | ●予想や仮説の検証に向けて調べる<br>・学校外での観察や調査などを通して調べる<br>・様々な種類の資料を活用して調べる<br>・他の児童生徒と情報を交換する | ●社会的事象（等）の意味や意義、特色や相互の関連を考察する<br>・多面的・多角的に考察する<br>・話し合う（討論等）<br>・社会に見られる課題を把握して解決に向けて構想する<br>・複数の立場や意見を踏まえて解決に向けて選択・判断する | ●考察したことや構想したことをまとめる<br>・学習課題を振り返って結論をまとめる<br>・結論について他の児童生徒と話し合う<br>・学習課題についてレポートなどにまとめる | ●学習を振り返って考察する<br>・自分の調べ方や学び方、結果を振り返る<br>・学習成果を学校外の他者に伝える<br>・新たな問い（課題）を見いだしたり追及したりする |

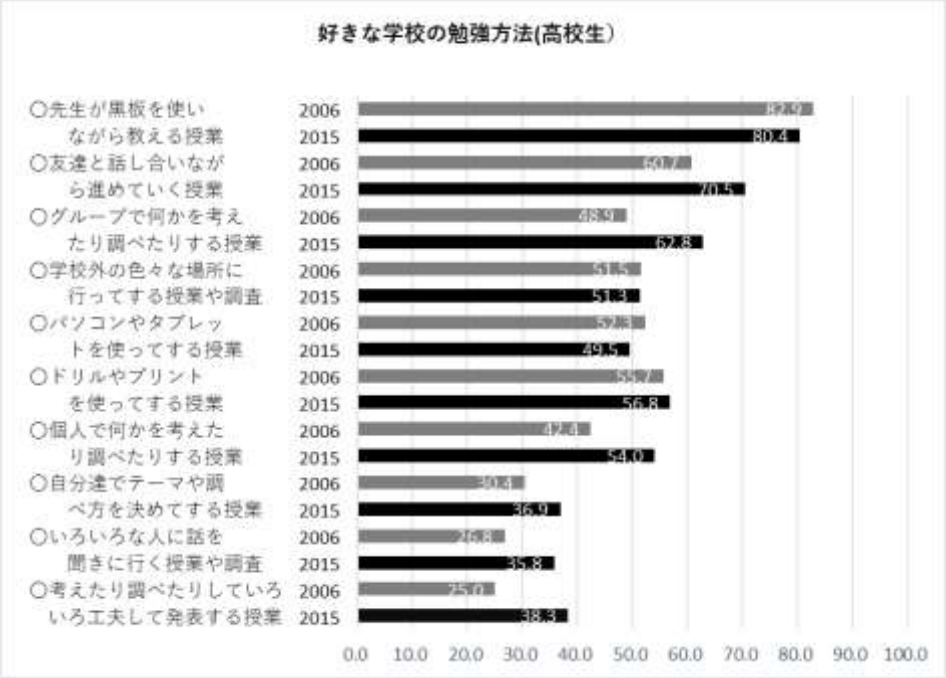
(4)　井田仁康「「課題」「把握」「解決」の柔軟な解釈でより有意義な授業を！」社会科教育、2016 年 12 月号、18－21 頁

(5)　第 6 回学習指導基本調査 2016 年　ベネッセ教育総合研究所（中学校教員 4414 人　高校 9746 人対象）



（6）　第 5 回学校基本調査 2015 年　ベネッセ教育総合研究所（中学校 2 年生 2699 人 高校 2 年生 4426 人対象）






(7) 市川伸一『勉強法の科学　心理学から勉強を探る』岩波科学ライブラリー211、岩波書店、2013 年

(8) 独立行政法人大学入試センター問題作成の方針　地理 B　問題作成部会の見解」97 頁

(9) 今井　むつみ『学びとは何か―〈探究人〉になるために』岩波新書、2016 年

(10) 思考力・判断力・表現力を問う条件付記述式問題について（たたき台）「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」高大接続システム改革会議　2015 年 12 月

参考文献

高等学校学習指導要領解説　地理歴史編　文部科学省　2009 年 12 月（2014 年 1 月一部改訂）

棚橋健治「「見方・考え方」によって明確化された“社会科を学ぶ本質的意義”」社会科教育、2016 年 12 月号、4－9 頁

草野和博「多文化的性格の地域を教師はどのように教えるか　－社会科教師の意思決定の特質とその要件―」社会科教育研究№116、2012 年、57－69 頁

『開発教育実践ハンドブック参加型学習で世界を感じる改訂版』開発教育協会、2012 年、58－60 頁

山口幸男・山本實・横山満・山田喜一・寺尾隆雄・松岡路秀・佐藤浩樹・今井英文・中牧崇編『地理教育研究の新展開』2016 年、古今書院